

亞屬を設立された。小生は *Theodorea* 節の亞節として取り扱つた。まことに *Saussurea* では珍しいものであるが其の分布が狭く、なんとか別のところにもありさうに思はれた。今度佐藤潤平氏が多數この種の標品をお送り下さつた。即ち鐵嶺 (17 sept. 1932 J. SATO n. 5790). 鄭家屯ボクトル山麓濕原 (9 sept. 1937 J. SATO n. 5692). が其の採集地である。本種の圖説は東亞植物圖説第一卷第四輯 (1936) にミギハヒゴタイ *Saussurea peipingensis* CHEN として北川政夫氏が立派な圖を出されてゐるから参考され度い。北川氏は *Saussurea elongata* の群だとの御考へだが *S. elongata* は地下莖の發達する多年生植物で全然異なるものと愚考する。CHEN 氏は後に LÉVEILLE 氏の Type を見て *S. peipingensis* CHEN が *S. chinmampoensis* に似てゐることに氣附いて Bull. Fan. Mem. Inst. Biol. VI (1935) p. 90 に *S. chinmampoensis* は *S. peipingensis* に似てゐるが、後者とは葉幅狭く總苞片無色で狭しと云つてゐる。然し其の生えてゐるところからもよく似てゐるし、分布區域は近いし、葉の幅にも色々あり總苞片にも様々で私は同種とする意見である。

Saussurea chinmampoensis LÉVEL. et VANIOT in Bull. Acad. Intern. Geogr. Bot. (1909) p. 145.—NAKAI in Tokyo Bot. Mag. XXIX (1915) p. 209.—KITAMURA in Acta Phytotax. Geobot. IV (1934) p. 4, Comp. Jap. (1937) p. 147.

Saussurea peipingensis CHEN in Bull. Fan Mem. Inst. Biol. V (1934) p. 87.—KITAGAWA in Iconogr. Pl. Asiae Orientalis Vol. I no. 4 (1936) tab. XXXVI p. 119.—HANDEL MAZZETTI, Notizblatt Bot. Gart. u. Museum Berl.-Dahalem XIII (1937) p. 648. syn. nov.

抄 録

フルテン：アリューシャン群島植物誌——Eric HULTÉN: *Flora of the Aleutian Islands and westernmost Alaska Peninsula with Notes on the Flora of Commander Islands* (1937) pp. 1-397.

ベーリング海峡の南、歐亞大陸と北米とを連結させて居る飛石としてのアリューシャン群島は植物地理上重要な位置にあるにもかかわらず、比較的近年まで調査が行届かなかつた、此の點から見て館脇操、小林義雄兩氏の採集旅行とその結果の報告は劃紀的のものであつた、今又 HULTÉN 氏のアリューシャン群島に關する報告書を得て同群島の植物地理は又一層明かに成つて來た、氏は館脇高橋兩氏 (1929) 及び小林氏 (1931) に次で 1932 年に EYERDAM 氏と同じく渡島、五月から八月まで諸所を採集し母國スエーデンに歸り、各國の標本室に保存されて居る群島の資材を調査して居たがその結果が本書と成つて表はれたのである。

氏に従へば群島には山が多くて、勘察加やアラスカと同様に極地高山要素が主要な分子を成して居るかと思像されるが、實際は、此れに反し此要素は群島の中央部では極貧弱で、ベーリング地帯及太平洋北部のみに分布して居る要素が重要なものと云ふ。そして群島の地形上から云ふと北米大陸の方に深い関係があり相に思へるのにかかはらず、實際此群島のフロラは亞細亞大陸の延長であり、植物相は勘察加によく類似して居ると。同群島中には森林が全く存在せず、且栽培の *Picea sitchensis* Car. を除き裸子植物を見ず、又コンマンドル諸島及アラスカ半島を除けばハンノキ、カンバの屬すらも見る事が出来ない。東はアラスカ半島の西端から西はコンマンドル諸島までを通じて僅かに 477 種しかなく、本群島の兩端地方に比し著しく種類が少く、吾が北千島全體よりは多い程度でフロラとしては貧弱である、此れは氷紀に於て同群島の殆全部が氷で被はれてしまつた爲め、大部分の植物は一度絶滅してしまつたによると考へて居る、(此の説明はともあれ事實は丁度北千島のそれにもあてはまる様に思はれる、南千島及勘察加に森林があるのにかかはらず北千島ではハヒマツ、ミヤマハンノキ等はあるが森林は全く存在せず、且その兩端の何れの地方よりも所産植物が著しく少ない)。

文献、異名、産地に次いで著者のノートがあり、全體を通じて比較的重要な部分をなして居る。そして世界の分布に終る各種類についての説明が 45 頁から初まり 342 頁で終つて居る、卷中所々に美しい寫眞版が挿入されて居て見る目をたのしませるに充分である。

(大井次三郎)

スタツプ氏:—リュウノウギク (O. STAFF:—*Chrysanthemum Makinoi* MATSUM. et NAKAI in Curtis's Botanical Magazine Tab. 9330 (1933).

Kew のスタツプ氏はリュウノウギクの圖説を Curtis's Bot. Mag. でやつた。これは中井教授のノヂギクに關する研究を讀んで其の結果菊の原種に關して論じてゐる。リュウノウギクの圖を色彩を入れて出してゐる、姿はよく出来てゐるが總苞の擴大圖がカーチスとしては一寸まづい。同氏は家菊は多系から出来上つたものだと考へてゐる。即ち MAXIMOWICZ 氏の系を引く考へで私もこの説に今のところ賛成である、尙同氏は *Chrysanthemum morifolium* var. *gracile* HEMSL. を *Chrysanthemum erubescens* STAFF としたがこの植物は *Chrysanthemum sibiricum* var. *latilobum* KOMAROV であつて、LING 氏が 2 年後 *Chrysanthemum Maximowiczianum* LING としたのと同じで共に異名となる。尙スタツプ氏は *Chrysanthemum sinense* var. *vestitum* HEMSL. を *Chrysanthemum vestitum* O. STAFF. とした。其の後これあるを知らず LING 氏も小生も別々に *Chrysanthemum vestitum* としたがスタツプ氏のが早くて正しい。京大の圖書室では不幸にしてカーチ